

逆説的な祝福

牧師 石川和夫

「柔和な人々は幸いである。
その人たちは地を受け継ぐ。」
(マタイ五・五)

今日の主題は、「教えるキリスト」です。すでに、少し聖書に親しまれた方は、キリストは、しばしば、逆説的に教えておられると、いつかにお気づきだと想います。

例えば、「得ようとと思う者は失う」とか、「偉くなりたい者は、低くなれ」とか、色々な場合に逆説的に説いておられる。これがイエスの教えの大きな特徴です。なぜ、逆説的に語られたのか？逆説的に語る、ということとは、相手に気づかせる、ということを意味しています。つまり、ある種のショックを与える。

「得ようとと思う者は、捨てなさい。捨てる者は、得るよ」といふ言ひ方は、「エッ、私たちの普段の考え方と逆じゃないか」と、まさしくショックを与えた上で、もう一度考えさせたい。そして、ああ、そうかと気づかせる。

だから、「耳のある者は聞くがよい」とイエスが言われたことも、言葉づらだけで聞くと、「当たり前じゃないか、耳があるから聞くのだ」となりますが、この言葉にも逆説があります。「ただ、ボヤッと聞いても駄目だよ、気づきなさい」といふことです。

私の信仰では、この気づきを助けてくださる神が「聖霊」なのです。私たちに、「気づきなさいよ」と見えないところで働きかけてくださって、「ああ、そうか」と気づかせてくださるのが、聖霊です。決して、神秘的な経験をさせることが聖霊ではありません。もちろん、時としては、そういうこともあるかも知れませんが、原則的に「気づきなさいよ」と働きかけて下さっているのが聖霊だと私は信じています。

なぜ、神さまは、私たちに「聖霊」として働きかけておられるのでしょうか？それは、「生きる」ということにおいて、「気づく」ということが一番大切だからです。「経験がおりだと思えますけれど、「気づかない」人ほど困った人はいません。結果的に、ほったらかされるのです。「仕方ないよ、あの人がくら言っても気づかないんだから……」

その結果、それが悪循環を起します。「気づかない」でいる間は、それが全部、自分の問題ではなく、人のせいになります。落ち着いていられませんから、「どうして、近頃、人

は私に冷たい視線をむけるのだろっつて、私も私が邪魔みたいだ」というような被害者意識的な感じ方をするようになります。

これも本当は、ハッと気づけば、「バカみた、いだったな」と自分を笑い飛ばせるのですが。

気づきは、生きるための出発点

つまり、「気づく」ということは、信仰的に言つと、「罪」「気づく」ということなのです。この「罪」は道徳的な罪ではなくて、本来の意味、「的を射はず」ということです。自分が見当外れな思い込みをしていた、ということに「気づく」のです。だから、その見当外れがおかしくなるのです。人々がそのように反応するのは当たり前じゃないか、それを全部、人のせいにして……、考えれば考えるほど、おかしくなります。そのように自分を笑えることがユーモアなのです。そして、心にゆとりが生まれます。この経験が積み重ねられることによって、心のゆとりも少しずつ大きくなってきます。

イエスは、その「気づき」を「えようとされた。気づくことが「愛」だからです。「気づかない」「愛は、愛ではありません。それは「親切の押し売り」に過ぎません。よいことをしたと満足しているのは、自分だけ、され

た側は、時によつては困つたなあ、と心に負担が出来てしまいます。「小さな親切大きなお世話」そのものですね。

イエスが逆説的な語りかけをされ、生きられた、ということには、神が人となられた、ということと本質的に非常に重要な関わりがあります。その典型が「死からの復活」ということです。死ぬ、ということが、生きる、ということに繋がる。イエスは、逆説そのものです。そのイエスが逆説の真髄を發揮されているのが、今日の個所です。

幸いは幸福とは違う

原文では、「幸いである」という言葉が一番最初に置かれています。だから、昔の文語訳聖書では、「幸いなるかな」と始まっています。この「幸い」という言葉は、私たちが普段使っている「幸福」といっしょにはいけません。

「不幸中の幸い」といふことは、根本的に違います。

旧約以来、聖書での「幸い」という言葉は、私たちの「状態」を指してはいません。これは神との「関係」を指している言葉なのです。しかも、この言葉は、神様に対しては決して使いません。ギリシア神話では、神々が幸いに思った、などという表現があるようですが、

聖書では、神が幸いを感じられた、などという表現は一切ありません。なぜならば、これは、神が人に対して宣言される言葉だからです。神との関係において、神が

「よし、いいぞ」とおっしゃることです。だから、一番最初の「心の貧しい人々は、幸いである。」ということも「よし、いいぞ、心の貧しい人々」ということになりま

す。「心の貧しい」ということは、自己中心的で、いつも欲求不満に満ちてガツガツしている人のことです。三十年前、ドイツの進学者のR・ポレンは「祝福を告げる言葉」という本の中で、こう言っています。

「新聞にひとりの男の顔を見ることがあります。テカテカに髪にボマードをなすりつけて、いくぶん前にうなだれて、ふたりの弁護士にはさまれて泣いている男の顔です。ポールマンです。ロス・マリーという娘を殺したと訴えられながら、証拠不十分で釈放された男です。ひどい環境の中を生きてきたひとりの人間です。テカテカのボマードをぬつた男なんて、私たちの教会に来ているキリスト者は、むしろ避けてしまつのが普通ではないでしょうか。そして証拠が不十分であれば、私たちはますますそういう人間に対する疑いの思いを深くするだけです。しかし、神はこのような人間のためにこの世に来てください

ました。そのような人間のかしらに罪のゆるしを置くこととしておられます。私たちがちょうどそのような人間をモはや非難することなく、むしろ祝福を呼びかけることを学びさえすることができたら、と思います。もし私たちがアルトマルクト(ウツパハタールの盛り場の名)を歩く時に、このことを理解していることができたなら、と思います。ペティコートに身をつつみハイヒールをはいている娘それは天国の人間なのです。」

私たちの人を見る目が変わらなければならぬのです。イエスのような目に変えられること、それが出来ない」と「幸いである」と言われないのです。そのため、私たちは敢えて逆説的に考え、受けとめなければならぬのです。

いい人になることをやめよう

逆説的に受けとめる、という「こと」は、「いい人になる」と「思うこと」をやめて、「悪くなる」「悪い人になる」と決心することです。

「私は、ほんとに悪いなあ」という自覚が祝福に至るのです。

「いい人になる」と努力している人は、うまくいかないと必ず人のせいになります。なぜなら、自分の動機は間違っていないのです

から、間違っているのは人だとなります。ましてや、神様のために、いいことをしようと努力している人は、結果が悪いと、あるいは期待した通りにならないと腹を立てて、結局人を切り捨てます。これが「わざわざ」なのだ、というのをイエスが主張しておられるのではないでしょうか。いつの間にか、神様に代わってしまいます。

「こんなに悪い信者はいないなあ」

「こんなに悪い牧師はいないなあ」

という自覚が祝福にあずかります。こんなに悪い者なのに、どうして、こんなによくしてもらえるのだろうか、と小さなことに大きく感動できるようになります。神様が「よし、お前、いいぞ」と言ってくたさる声が届くようになるのです。

避けたい状態が幸い

今日の聖書の個所で、イエスが「幸いである」と言っておられる八つのことは、どちらかと言えば、私達が避けたいと思っている状態です。

「悲しむ者」になるよりは、「喜ぶ者」になりたい。「柔和な者」というのは、順接的に聞こえるかも知れませんが、どちらかと言えば、人に無視されやすい。広辞苑を引いてみると

「性質がやさしくおとなしいこと」となっています。いわゆる「いい人」のことです。でも世間では、あまり評価されません。「あの人は、いい人なんだけど、酒を飲むと人が変わる」とか、「人はいいんだけど仕事は任せられないね」という具合です。

「義に飢え乾く」というのも同じです。いわゆる「正義感の強い人」のことです。妥協をあまりしませんから、頑固者として敬遠されます。

「憐れみ深い」ということも常識離れた変人と扱われやすいでしょう。野良猫ばかり何百匹と飼っているおばあさんのように。

「心の清い」ということも順接的に聞かえますが、本来の「清い」という意味は、「不純物が無い」ということです。いわば「単細胞」と言われる人々です。

「平和を実現すること」も理想主義者と受け取られたり、場合によっては「非国民」と呼ばれたりします。

「義のために迫害される」ということは、もはや説明を要しません。とにかく、イエスは私たちが避けたいとか、場合によっては、軽蔑したり、排除したくなる種類の状態の人々を見直せ、とおっしゃっています。

柔和な人々は、幸いである

一九七三年、当時、私は北海道で、ラジオ伝道をしていました。出入りしている若者たちが「サンゴ礁」という月刊雑誌というか、新聞のようなものを発行していました。その雑誌に、私は「ミニ・メッセジ」人と共に生きる』というコラムを書いていました。その八月号に、こんな記事があります。

「六月下旬から七月上旬にかけて、北海道の各小学校はいっせいに運動会を開きます。多くの友人の牧師の長女が小学校一年生で初めての運動会を迎えました。ご存知のように、運動会は日曜日になりますね。日曜日は牧師夫妻にとって一番忙しい日です。前の晩にお嬢さんによく言い聞かせて、朝の礼拝が終わったら、すぐに、お母さんがお弁当をもってかけつけるから、それまで我慢してもらおうように約束しました。

さて、礼拝が終わってから、そんなに遠い所でもないけれど、タクシーに乗って、お母さんが弁当を持ってかけつけてみると、もうお弁当の時間になっていた。ああ、大変だと心配しながら、校門に着くと、そこに、担任の先生に手をしっかりと握られて、お嬢さんが待っていた。ただ、それだけです。お母さんは大変感激されたそうです。どんなに心細

い思いで、娘が待つていただろうかと、という心配が一度に消し飛んだことでしょう。この担任の先生は、ふだん親たちや同僚からは、ウスノ口と言われて、どちらかといえば、バカにされているタイプの先生だったそうです。（まさに、柔らかな人を絵に書いたような先生です）しかし、そういう先生だったからこそ、この子が待つているのは、お母さんと彼女が持つてくるお弁当だ、ということを充分に感じることが出来たんだと思うのです。だから、自分も、弁当を食べないで、クラスからも離れて、彼女と一緒に、校門に立つて待つていた。

これが気のきく先生だったら、自分のお弁当や、友だちのお弁当を分けてやるようにしていたでしょう。そうしたら、あの子の淋しさは、ちつとも癒されなかつたでしょう。あの場合に、この先生は、最高の愛のわざを、恐らく、無意識にしていたのです。きっと、このお嬢さんにとつても、生涯忘れ得ない思い出の一つになつていたでしょうし、この経験が、彼女の人格形成に非常に大きな影響をもたらすことだろうと思います。これがほんとうの教育だと言つてもいいのじゃないでしょうか。」

「柔らかな人々は、幸いである」ということは、こういふことだつたのですね。気の利く人間には気づかないことに気づくのです。だ

から、私達が自分に言い聞かせる大事なポイントは、「自分はほんとうにダメな人間なのだ」という自覚をどれほど持つてているか、ということとです。それが、「あなたは幸いだ」と言われることに繋がります。

だから、私は、信者として、クリスチャンとして精一杯がんばつていきます、という生き方は、どうしてもとげとげしくなつてしまいます。結果的には、人を裁き、自分だけが一生懸命、神様からは、「おい、おい、困つたやつだな」と言われているのに、それにも気づかなくなつてしまつたのです。

イエスの逆説的な祝福の意味をよく考えてみましょう。二〇〇〇年の歴史を持つキリスト教もギリシア・ローマ・ヨロッパ的解釈に支配されてきたから、いつの間にか、「ねばならない」という倫理宗教になつてしまつて、あのイエスの生き生きとした復活の生命を失つてきたのだと思います。

オリエンタル・アジア的な発想というのは、逆説を本当に大事にします。喜劇人が人を喜ばせているのも、逆説的なパフォーマンスによるのです。逆説的な在り方こそ、愛になります。イエスは、死んでもよみがえる、という逆説を身をもつてお示しに成つたのです。

(一月六日礼拝説教要旨)